

第2章 沖縄における平和教育

第2章 沖縄における平和教育

沖縄本島南部の糸満市にある沖縄県平和祈念資料館には毎年40万人が来館する。その半数以上が本土からの修学旅行生である。同館と同じ糸満市にあるひめゆり平和祈念資料館は「ひめゆり部隊」の名で知られる女子学徒の看護用員としての体験を元に作られた施設で、ここも地元の生徒たちに加え、本土からの修学旅行生が多い。

修学旅行の主なポイントは、独特な歴史や自然、そして平和学習の場としての沖縄である。沖縄を訪れる多くの修学旅行生が平和祈念資料館などの平和学習に関係する施設を訪れ、沖縄戦の経緯や住民の被害についての展示を見る。そして米軍基地を外から見て、「基地の島」沖縄の置かれている現状を学習する。

日本における平和学習の場は、長年広島や長崎がよく知られてきた。沖縄が広島や長崎と同じように、平和学習の場として注目を集めるようになってきた背景には、沖縄県民が沖縄戦での自らの体験を語り、米軍基地を多く抱える重圧を全国に訴え続けてきたことが挙げられる。

沖縄戦は、20万人以上の犠牲者を出す悲惨な戦争であった。軍人の数をはるかに上回る住民の犠牲があった。沖縄の人々は自らの戦争体験を語り、記録化した。自分たちの住む村や町が戦場になったこと、かけがえのない肉親を失い、郷土が焼け野原と化したこと。戦争がいかに醜く悲惨であるか、命がどれほど尊いものであり、肉親を失った悲しみがどれほど深いものであるかを、自分たちの言葉で語り、それは記録化され後世に伝えられている。

学校や地域において、体験者を招いての講演や戦争遺跡の訪問、戦時中の暮らしの追体験などが行われた。家庭でもごく普通に祖父母や親から戦時中の体験が語られてきた。家族や親族、身近な人を通して聞いた「沖縄戦」は、沖縄の子どもたちの胸に深く刻まれ、「命の尊さ」を教えた。

しかし、年月を経るにつれ、沖縄戦体験者の高齢化等により、日常生活の中で戦争体験が語られることは少なくなった。この体験を風化させずに語り継いでいこうという試みが沖縄の人々の間に生まれ、現在では学校や地域で、平和を教え、伝える試みが行われている。

沖縄戦に続いて沖縄は1945年から1972年までの27年間、米軍政治下に置かれた。日本国内法が適用されない状況下で、軍事基地機能を優先する米軍の統治下で、人権の抑圧が行われた。沖縄戦とあわせ、異民族統治の問題を追及することも、復帰前の沖縄にとって大きな平和教育のテーマであった。

もう一つ沖縄で「平和」とその対極にある「戦争」を、いやが上にも考えさせるのが、広大な米軍基地の存在である。「沖縄からは安保⁷³が見える」とよく言われる。日本の国土面積の1%に満たない沖縄に、在日米軍専用施設の75%が集中する。沖縄県民は米軍基地の整理縮小を戦後訴え続けてきたが、それは必ずしも県民の希望通りには進まず、基地から派生する問題が県民の生活を圧迫し、現在に至っている。

平和を発信する県民の努力は、これらの大きなテーマを軸に、県民が歩んだ多難な戦後を検証するような形で、続けられてきた。

⁷³ 日米安保条約（正式には日本国とアメリカ合衆国との間の相互協力および安全保障条約）のこと。1960年に署名、発効された。1951年にサンフランシスコ平和条約と一緒に締結された旧安保条約を改定して継承したもの。沖縄の米軍基地は、日本復帰後、この条約に基づく提供施設となっている。

最近では、日本だけでなく国外からも県民の平和への願いが注目を集めるようになった。沖縄における米軍基地の重圧は外国のメディアでも大きく取り上げられた。また、軍人、民間人、国籍を超えて命の尊さを訴えた「平和の礎（いしじ）」の精神は、国内外で共感を得ている。1999年に創設された「沖縄平和賞」は、従来の沖縄発の平和発信の概念をさらに広げている。「沖縄戦」、「米軍基地」という「被害」を受ける立場からの発信だったのが、より積極的に沖縄の人々の平和への願いを世界に広げる意味を持っているといえる。

本章では、沖縄がなぜ平和を伝えようと努力するのか、沖縄が訴える平和とは何か、どのようにしてそれが行われてきたのか、そしてそれは現在どのように変化してきたのか、その意義や歴史、現在と将来の課題について述べる。

2 - 1 庶民が語り継いだ沖縄戦

沖縄における平和教育の大きなテーマである沖縄戦。なぜ、この沖縄戦が戦後ずっと平和教育のテーマであり続けるのか。沖縄戦にいたる経緯と沖縄戦の特徴をここで紹介する。

2 - 1 - 1 沖縄戦

(1) 戦前の沖縄

沖縄県は古来、中国や周辺アジア諸国との交易をもとに琉球王国として栄えていた。しかし、17世紀はじめに薩摩藩（現在の鹿児島県）の侵入で江戸幕府の体制化に組み込まれた。その後江戸幕府は倒壊して日本の封建制に終止符が打たれ、天皇制の明治政府が1868年に誕生した。天皇制の国家となった日本は、1872年にそれまでの琉球王国を「琉球藩」とし、鹿児島県（旧薩摩藩）の管轄にあった琉球を直接の管轄に移した。1879年には琉球藩が廃止され、日本の一県「沖縄県」と改称され、琉球王府は滅びた。

近代化を急ぐ日本は、富国強兵策をとり、軍備を拡張し近隣諸国への侵出を狙った。一方で、国民に対しては天皇を神格化し、天皇に追従する臣民を育てる目的で皇民化教育を進めた。

この皇民化教育は沖縄に対して特に強力で推し進められた。それは、沖縄が独特な文化と他府県と異なった歴史を持っていたため、日本への同化を進める政策とあわせて、教育の根底をなして推進された。1887年には全国の師範学校より早く「御真影⁷⁴」が沖縄県尋常師範学校に配布された。

皇民化教育は、ともすれば沖縄の風俗や文化を否定する形で進められる傾向にあった。たとえば標準語励行は、教育の場で方言の話者に「方言札⁷⁵」を掲げさせたりして罰則を与えるなどの強引なやり方で進められた。また、沖縄固有の姓名を日本風に改めたり、村ごとに神社を建立させる運動なども起こった。標準語励行に対しては一部知識人から沖縄の文化を否定するものとして、県の性急なやり方を批判する動きもあった。県内賛否両論に分かれて論争も行われたが、結局標準語励行運動は推進された。皇民化教育も明治から大正、昭和を通じて継続され、終戦まで続けられた。

⁷⁴ 天皇崇拝を国民に深く浸透させるため、全国の学校に配布された天皇と皇后の写真。

⁷⁵ 標準語励行の強硬手段としてとられたもの。学校などでよく用いられた。方言を使った子どもはこの「方言札」とかかれた札を持たされ、次に方言を使った子どもがいたら、それを手渡すという仕組みだった。

(2) 日本のアジア太平洋への侵攻

富国強兵策により軍が拡大した日本は、中国への進出を企て1931年に満州事変を起こし、1937年の盧溝橋事件をきっかけに日本と中国は全面的な戦争状態とった。日本は軍事的にも経済的にも困難に陥り、戦線の拡大は米英との利権対立となり、太平洋戦争の開戦にいたった。

1941年12月8日、日本はハワイの真珠湾とマレー半島を攻撃した。その後も次々と南洋各地を攻撃して勝利したが、急速に拡大した戦況への対応に苦慮し、戦争が長期化して泥沼化していった。1942年のミッドウェー海戦で大敗した日本は、1943年にはガダルカナルを撤収、1944年2月にマーシャル群島陥落、7月にサイパンの日本軍が全滅し、8月にはグアム、テニアン島の島々でも日本人は敗北を帰した。

(3) 沖縄戦の経緯

沖縄戦の開始は、1945年3月26日に米軍が沖縄本島の西にある慶良間諸島へ上陸以来の戦いとされるが、実際には前年の1944年10月10日に行われた10・10空襲ですでに沖縄は攻撃されている。10・10空襲とは、1944年10月10日、米国機動部隊が沖縄に行った大空襲のことで、米軍が日本に対して行った最初の空襲である。沖縄に来襲した米軍機は延べ900機。主として沖縄の日本軍飛行場であった嘉手納や読谷、そして那覇の港湾などが空襲を受けた。全県下の死傷者が1,500人。特に那覇市の被害が大きく、死者の半数近くを那覇市が占め、市の90%が灰燼に帰した⁷⁶。

沖縄戦に米国が投入した兵力は総兵力で54万8,000人、日本軍が10万2,000人。因みに米軍上陸直前の沖縄の人口は45万人であった。日本軍兵力の10万2千人のうち、2万5千人は沖縄で調達した、民間人の成人などで構成される防衛隊員や学徒動員によるものだった。艦船は米軍が1,500隻、日本軍は海上特攻艇が300から400隻。総戦力の比較では米軍は日本軍の10倍。兵器、艦船、軍用機、兵員、補給物資などすべての面で米軍が圧倒的に優位にあった⁷⁷。米軍は、1945年3月26日に慶良間諸島に、4月1日には本島中部の西海岸に上陸し、それから約3ヶ月の間地上戦が行われた。

以下、「沖縄県平和祈念資料館総合案内⁷⁸」、「鉄の暴風⁷⁹」、「沖縄の証言⁸⁰」から沖縄戦の経緯とその特徴を追ってみる。米軍は上陸したその日に、日本軍の北飛行場（読谷村）と中飛行場（嘉手納）を占拠し、2日には沖縄本島のもっとも幅が狭い部分の石川線で本島を南北に分断した。北と南の二手に分かれて本島を攻略した米軍は本島の北部一帯をほぼ制圧したが、中南部では日本軍の激しい抵抗にあい一進一退の攻防戦を展開。5月には日本軍の司令部がある首里で激しい戦いが行われ、日本軍は南部に撤退した。4月下旬に行われた浦添村（現在の浦添市）前田における日米の戦闘は、4日間にわたって繰り広げられ「ありったけの地獄を一つにまとめた」と、米軍の戦史が伝える激しい戦闘となった。

南部一帯は那覇や首里、中南部からの避難民と敗走する日本軍が入り乱れる戦場となった。6月22日の日本軍守備軍の司令官の自決により、組織的抵抗は終了した。沖縄戦の犠牲者については確固としたものはないが、ここでは、平和祈念資料館で示されている数字を使う。全戦没者数20万656人で、米軍が1万2,000人、他都道府県出身者が6万5,908人、沖縄出身者が12万2,228人。この中の9万4,000人が一

⁷⁶ 沖縄タイムス社（1983） p. 372

⁷⁷ 沖縄県平和祈念資料館（2001） p. 81

⁷⁸ 同上 p. 60～67

⁷⁹ 沖縄タイムス社（1950）

⁸⁰ 名嘉正八郎・谷川健一（1971）

般県民で、その他が、県出身の軍人や防衛隊、学徒隊などの軍属も多く犠牲となった。

2-1-2 自然発生的な平和教育

(1) 肉親が語る沖縄戦

激しい沖縄戦を体験したこの地で、平和と命の大切さを教える教育は、戦後、自然発生的に起こったといえる。「平和教育」の「実践」の場となったのは、戦後の当初は学校というよりはむしろ、家庭や地域コミュニティであった。実践していた人々も普通の庶民であり、「教育」という意識は薄かったはずである。むしろ、自身が体験した事実を、胸の奥から少しずつ搾り出すように語り継いでいったのが、沖縄で「平和を教える」ことの始まりだった。

「沖縄から平和学習へのメッセージ⁸¹」のまえがきの中で、著者の一人、新里誠氏（TOSS沖縄教育サークル代表）が、自身の親から聞いた戦争体験について書いている。当時4歳だった著者の母親は、祖母に手を引かれ空襲の合間をぬって避難していた。その時、祖母が著者の母親に「ぐずぐずしていら置いていくよ」と言った。母親は今でもその言葉が忘れられないと語るという。その時の祖母の鬼のような顔が今でも忘れられないのだという。いつも仏のように優しい自分の母親が、戦争の最中自分を置いていってしまう。それは四歳の少女にとって死を意味する。

新里の父親は戦争当時10歳。ねずみや蛇まで食べられるものは何でも食べたがいつも空腹だった。夜、壕を抜け出して食糧を探しに行ったら何かが彼の腹をかすめた。小銃の弾だった。著者の父親は戦後、よくその傷跡を示して、あの戦渦を潜り抜けてきた体験を語ったのだという。

このような親や祖父母など肉親からの戦争体験談は、普通の家庭で普通に語られてきた。語った側は、自分の体験を「平和教育」とか「命の尊さ」を教えるというような、崇高な意味を持って語ったわけではなかっただろう。聞いている側も、教育を受けているという緊張した意識を持っていたわけではなかったと思われる。ただ、聞いた側には、戦争の恐ろしさとか、弾が飛び交う戦場に残される恐怖感とか、自分の腹をかすめたのが小銃の弾丸であったときの恐怖感というのは、強く記憶の中に刻み込まれたはずである。

筆者（澤舩）にも同じような体験がある。私の祖父母は南部の激戦地をさまよった避難民たちであった。避難していた場所の近くで空襲を受け、祖母は末娘を失った。祖父はその間近にいて奇跡的に難を逃れた。祖父母は4人の息子のうち3人を戦争でなくしている。長男を満州で、次男を南洋で、4男は防衛隊員として召集され沖縄で亡くなった。どの息子の遺骨も手元に届かなかった。祖母は毎年沖縄戦終戦の日とされる慰霊の日に行われる平和行進に参加していた。那覇市内の遺族連合会館から沖縄戦終焉の地の糸満市摩文仁までの24kmを歩いた。炎天下の行進は老人にとって随分苦しかったはずだが、息子たちの苦しみを少しでも自分に与えて自身を罰しているようにも見えた。家に戻ると汗とも涙ともわからない顔の水滴をタオルで何度も拭いて「いくさーならんどー（沖縄の方言＝戦争はもう本当にいやだ）とつぶやいていた。私の妹は小さいころ熱を出すと、うなされて枕を持って「戦争が来る」「戦争が来る」とうわごとをよく言った。祖父母や父母から聞かされた戦争の話が強く心に染み付いていたの

⁸¹ TOSS沖縄教育サークル（2000）

だと思ふ。

親や祖父母という身近な肉親から語られる戦争は、論理的に整理されたものではなかったが、それだけに、強いインパクトを聞くものに与え、知らず知らずのうちに、若い世代に戦争の恐怖、醜さや悲惨さ、肉親を失った悲しみや喪失感を教えていった。

(2) 沖縄戦体験の記録と出版へ

自然発生的に、沖縄の人々は、自らの体験を語り、「平和教育」の一翼を担ってきたが、やがてそれは、ものを書くことができるような立場の人たちによって、活字化されるようになってきた。戦争の記録はふつう、武将や兵士、戦勝国の指導者たちの戦いのことであり、一般住民が主体でまとめる戦記は、沖縄戦終結当初は、ほとんどなかった。戦後の沖縄の戦争記録や、文学についてまとめた、「沖縄の戦記⁸²」の中で、著者の仲程昌徳は、沖縄の戦後文学を大きく、四期に時代を区分している。戦記作品の先駆的作品が発表された時期で、1945年から1949年までを第一期。沖縄出身の体験者によって書かれた、実録類が出た、1950年から60年までの時期を第二期。さらに、1960年代後半から1970年代初期までの、沖縄戦を体験しなかった、本土在住の作家たちによって沖縄戦が書かれた時期を第三期。非戦闘員であった、人々の戦争体験が収集され、記録が書かれた第四期が、1970年代以降、現代までの期間である。⁸³

以下では、後の沖縄戦体験記録のさきがけとなった初期の作品に注目してみる。

第一期の文学は日本軍の兵士による軍部への批判を中心としたもので、非戦闘員や住民の問題はほとんど取り上げられてこなかった。

1950年になってはじめて、沖縄の戦記が沖縄の人々によって書かれた。終戦後、家庭や地域で語られていた戦記だが、沖縄の人々が、これを活字にしようと思うまでに数年かかっている。この時期になってやっと、廃墟の中から、どうにか生活する目途が立ったこと、敗戦後の虚脱状態や混乱状態から、ようやく立ち上がることができるようになったこと。戦場を体験した人々が、生活を取り戻し、表現への意欲をもつようになったといえる⁸⁴。

沖縄戦の様相を、住民の視点に重点をおいて、沖縄の人たちによって書かれた、初めての書が1950年に出版された「鉄の暴風⁸⁵」である。まえがきには、この本の出版の意図が、次のように明確に記されている。少し長くなるが、ここに前書きの概略を引用する。

「ここに米軍上陸から、日本守備隊が潰滅し去るまでの、住民の側から見た、沖縄戦の全般的な様相を描いてみた。生存者の体験を通じて、可及的に正確な資料を蒐集し、執筆し、書きおろし戦争記録として読者賢者にお送りするものである。軍の作戦上の動きを捉えるのがこの記録の目的ではない。飽くまで、住民の動きに重点を置き、沖縄住民がこの戦争においていかに苦しんだか、また、戦争がもたらしたものは何であったのかを、ありのままに、訴えたいのである。このことはいかなる戦場にもなかつ

⁸² 仲程昌徳 (1982)

⁸³ *ibid.* p. 12

⁸⁴ *ibid.* p. 46

⁸⁵ 沖縄タイムス社編 (1950)

たことであるし、いかなる戦記にも書かれなかったことである。(中略) 逃げ場のない幾十万の住民が、右往左往して、いたずらに砲弾の犠牲となり、食に飢え、人間の悲劇の極致を展開した。住民は洞窟から洞窟へ、墓から墓へ、わずかな荷物を抱えて、死の彷徨をつづけた。あるいは、一族が先祖の墓の中で死を待ち、あるいは、一つの洞窟の中に、何百の老若男女が押し込まれて、陰惨な生活を続けた。(中略) 辛うじて死を免れた人々は極度の緊張と、栄養失調と、不自然な壕生活のために生きた人間の姿とは思えないほどだった。それは、人間の体力を維持するには、あまりに無理な、ながい疲労と、不潔と、暗黒の生活だった。死ぬことを教えられて、しかもたえず死の恐怖に戦慄しつつ、生を求め続けようとした人間の最後のあがきであった。ここに土壇場まで追い詰められた人間の、いろいろな姿がある。ここに真実の物語がある。もちろんわれわれは、日本帝国主義の侵略戦の犠牲となったが、われわれがいわんとするものは、もっと、深いところにある。『民族を超えた、人間としての理解と友情』われわれは、それを、永遠の平和を希求する⁸⁶」。

この長い前書きを引用したのは、ここに書かれた住民の沖縄戦がこの後、学校を含め、沖縄戦を題材にした平和教育の、重要なテーマになった部分が多いからである。「鉄の暴風」は、米軍による検閲を意識したことや、それを意識したことによる、自己検閲などがあって筆を惜しんでしまったことなど、反省材料も指摘されている⁸⁷。また、1980年代に入って、本土の作家により事実誤認があるとして、厳しく批判されたこともある。しかし、沖縄だけでなく、本土でも多くの人々から、共感を得て、沖縄戦記録のバイブル的存在となり、「沖縄戦観」に影響を与えた。「鉄の暴風」は、1950年10月から琉球放送(AKAR)によって毎晩朗読放送され、多くの人々に感銘を与えた。

1951年には「沖縄の悲劇—姫百合の塔をめぐる人々の手記」が、同女生徒らを引率した教員の1人である仲宗根政善によって出版された。看護用員として戦争に動員され、悲運な最期を遂げた、若い女生徒たちの手記をまとめたものである。その後1953年には男子学徒隊の記録である「沖縄健児隊」が出版された。鉄血勤皇隊として沖縄戦に参加した14人の手記が掲載されている。編集にあたったのは、1980年代に沖縄県知事になった大田昌秀らだった。これらの刊行本は沖縄戦が武器を用いての兵士同士の戦いという、通常概念をこえて、少年や少女まで戦場に狩り出すむごいものであったことを改めて示した。

住民の戦争体験を記録しようとする試みは、その後も広がりをもって続けられた。1971年に出版された沖縄県史の「沖縄戦記録Ⅰ」は、1,000人近い体験者に接触し、40回あまりにわたって、北谷、北中城、那覇、島尻の全域で座談会、直接の聞き取りなどを行い、戦争体験をまとめた。

この県史編纂事業に関わった名嘉正八郎は、著書「沖縄の証言⁸⁸」の中で、なぜ庶民の戦争体験なのかについて次のように語っている。

「自己の生活を守る以外になんの関心も持たない庶民に戦争がいかなるものと受けとめられたかということが、彼ら自身の口を通して語られたことがない。自分たちの生活の場を提供した沖縄にとって、そうした戦争記録が生まれていないことは重大な欠如と私には思われた⁸⁹。」

⁸⁶ ibid まえがき

⁸⁷ 仲程昌徳 (1982) p. 54

⁸⁸ 名嘉正八郎、谷川健一 (1971)

⁸⁹ 同上 p. 192

同著はインタビュー等を経て、1969年に本格作業に入り、1971年の出版にいたった。

1974年には、沖縄戦記録Ⅰに集録できなかった証言とあわせ、宮古や八重山を含む本島周辺離島やサイパンなどに至るところまで網羅され、これにより沖縄全域における住民の戦争記録がまとまった。

この同じ年には那覇市が「市民の戦時・戦後体験記1」を発刊した。那覇市史編集室が1971年に行った公募原稿をもとにまとめたものであった。その後那覇市は1977年に「忘れられぬ体験」と題して新たに原稿を公募し、1981年に「市民の戦時・戦後体験記録2」が刊行された。

1982年には宜野湾市が第三巻で「市民の戦争体験記録」を出版、1984年に浦添市、1987年に西原町、1990年には中城村、座間味村などが続き、十数の市町村で、住民の戦時体験記録が市町村史として出版されている。

2-2 学校における平和教育の実践

沖縄戦は県民が体験した大きな悲劇であった。その継承は、誰からともなく始められ、地域でも学校でも行われ、それは今も続いている。沖縄戦だけでなく、それに続く異民族支配、復帰後も続く米軍基地の重圧など、平和教育のテーマは常に県民の身近に存在した。ある意味では沖縄の社会や歴史そのものが平和を考える題材を与えてきたと言える。沖縄戦、異民族支配、軍事基地と、それらが個々に独立してあるのではなく、相互に関連している。前節では、沖縄戦が体験者の口からとつとつと語られて、平和の大切さが伝えられてきた経緯をみてきたが、この項では学校における平和教育についての実践例や経緯等を紹介する。

2-2-1 沖縄戦をどう教えるか

沖縄戦終結の日とされる6月23日は「慰霊の日」で、沖縄県では公休日でもある。6月は沖縄にとって慰霊の月であり、全県下で、沖縄戦の犠牲者の追悼や、それに関連した行事が行われる。ほとんどの学校で、6月23日の「慰霊の日」の前に、平和集会や特設ホームルーム特設授業などの形で実施される。沖縄戦の全体像を把握させ、特徴を浮き彫りにし、平和の尊さを子どもたちに教え、平和の持続を願う心を育てるとするのが主な目的である。体験者による講話、沖縄戦関連のフィルムの上映、写真パネル展示、戦争関連図書の朗読など多彩な方法で、慰霊の日についての学習が行われている。

特に1960年代の後半以降は、「特設授業」が教職員団体により提唱され、取り組みが強化されてきた。なぜ特設授業なのか。沖教組はその目的を次のように語っている。

「敗戦直後、数年間は寄ると集まると戦争の悲惨な体験談に花が咲き、戦争への憎しみが語られたものですが、今日では戦争体験のない、いわゆる戦後世代が人口の大半をこえ、家族同士でさえ戦争が話題になることが少なくなっています。(中略) 悲惨な戦争を体験し、戦後27年余も異民族支配におかれて、あらゆる困苦と不自由を味わった沖縄の教職員として、今一度去る戦争を想起し、反戦平和、民主主義、人権尊重を守る決意をかためなければなりません⁹⁰。」

⁹⁰ 沖縄県教職員組合（1982）

体験者により、普段の生活の中で語られ、継承されてきた沖縄戦の体験が、戦争体験世代の減少により困難になってきた。この頃から、沖縄戦体験の風化がいわれ、平和への想いをどう伝えるかに教育現場の教員たちが危機感を持って取り組みを始めた。「慰霊の日」特設授業の指導案（1978年）の一事例⁹¹から概要を以下に紹介する。

(1) 特設授業

6・23「慰霊の日」

1. ねらい

慰霊の日は、沖縄で海に、山野に、空に散った人々の霊を慰める日であることを理解させると同時に戦争を憎み、いつでも平和を愛する心情を育てる。

2. 指導内容

① 慰霊の日はいつか

② 何をする日か

③ なぜ、沖縄だけにあるか

④ 沖縄戦における被害状況、主に戦死者の数

⑤ 今、沖縄で平和をおびやかすものは何か

米軍演習・104号線闘争、自衛隊配備強化、基地公害

⑥ 私たちの生命、自由、財産、平和を守るために、私たちは今どんなことをなすべきか。

<小学校高学年用指導案（例）>

① 題材：「慰霊の日」について

② 本時のねらい：沖縄戦の概要を知り、郷土沖縄で残酷な戦争があったことを身近なこととして理解し、「慰霊の日」の意義を考えさせる。

③ 本時の学習にあたって

子どもたちにとって、戦争はテレビなどの経験で“カッコいいもの”“おもしろいもの”などの意識があると思う。それは、戦争を賛美し、英雄的な人物像を描いている現在の映画に問題はありはしないだろうか。この教材を取り扱うにあたって戦争の悲惨さと生命の尊さを理解させる必要があると考えられる。

過程	学習内容および活動	指導上の注意
つかむ	①今までに沖縄戦について聞いたり読んだりしたことを発表する。 ☆ひめゆりの塔 ⁹²	戦争の話を聞いたときにどう感じたか。今はどう思っているか、などを考えさせるようにする

⁹¹ 沖縄県教職員会（1978） p.60

⁹² 沖縄戦で犠牲となった、沖縄師範学校女子部および県立第一高等女学校の生徒・職員を合祀する慰霊塔

	☆健児の塔 ⁹³ ☆摩文仁の丘 ⁹⁴ ☆戦死した祖父母	
深める	②沖縄戦についての先生の話や資料を基に①を深める ☆老人や婦人の動員 ☆対馬丸事件 ⁹⁵ ☆10・10空襲 ☆集団自決 ⁹⁶ ☆首里から南部までの攻防戦 ☆健児の塔 ☆ひめゆりの塔 ☆戦死者の6割が県民（県民の3分の1） ☆発掘されない遺体が2万もある ③自衛隊問題についての説明を聞き、皆で討議する	全部について説明をすることは無理があるので、その中から2、3選んで掘り下げる 県民の悲惨な戦争体験と戦争の残酷さ、醜さ、人間の命の尊さを理解させる 自衛隊の違憲性を取り上げ、自衛隊の是非について討議させる
纏める	④感想文等を書いてまとめをする	戦争を憎み、世界平和を願う気持ちが表れるようにする
広げる	⑤読書をする 家族で慰霊の日の意義について話し合う	平和についての読書ができるようにし、家族との語り合いのきっかけをつかませる

上記の指導案がねらいとするのは、沖縄戦の全体像を描きながら、特徴的なことを住民の視点から明らかにすることである。たとえば、「ひめゆりの塔」「健児の塔」などの戦跡から見えてくるのは、学校の生徒らも戦場にかり出されたこと、乳幼児から老人、女性に至るまで犠牲者となったこと、不発弾がまだ残っていることを示しながら、まだ続く「戦後」を描きだすことである。

沖教組⁹⁷は特設授業の実施日として年五回を1960年代の後半に提唱した。すなわち、①5・3憲法記念日、②5・15施政権返還の日、③6・23慰霊の日、④10・21国際反戦デー、⑤2・11建国記念日を設定している。実施状況については、沖教組中頭支部の調査があるが、慰霊の日が最もよく行われ、92.5%。最も低いのが国際反戦デー49.7%となっている⁹⁸。これは、1982年の調査であり、現在とは状況はかなり異なるものと思われる。

⁹³ 沖縄戦で戦没した師範学校男子部と、中等学校の職員・生徒を祀る慰霊塔

⁹⁴ 沖縄戦の終焉の地で、激戦地でもあった一帯をで、数多くの慰霊碑が建立されている

⁹⁵ 1944年、沖縄から九州へ向かう学童疎開船が米潜水艦に撃沈され、学童を中心に1500人が犠牲となった事件。

⁹⁶ 沖縄戦中に激戦地で起きた集団の自決で、逃げ場を失った避難民の間で、家族単位や壕単位でおきた。最近、「集団自決」という言葉に代わって「集団死」という言い方もよく用いられる。

⁹⁷ 沖縄県教職員組合の略称。復帰前は組合組織ではなく、沖縄教職員会。

⁹⁸ 同上 p. 97

(2) 体験型の平和教育

写真パネルや解説文、沖縄に駐留する米軍に関する専門家の講話や、戦争体験者の体験談を通して「慰霊の日」について生徒に考えさせる特設授業は、もっとも一般的な形として、現在も多くの学校で実施されている。最近では戦争体験世代の減少や、「マンネリ化している」などの批判もあり、現代の子どもたちに説得力のある平和教育をいかに創造するかは、現場にとって大きな課題でもある。

講演を聞いたり、展示パネルや映画を鑑賞したりといった、受身の平和学習から、近年は体験型の平和学習が盛んである。平和祈念資料館や、ひめゆり平和祈念資料館などの平和教育施設の訪問、戦跡でのフィールドワーク、「ガマ」を使っての体験学習も行われている。

特にガマについては、沖縄戦の悲惨さを住民の視点で説く平和学習の場として近年よく活用されている。ガマとは、自然の鍾乳洞のこと。石灰岩が水によって浸食されてできたもので、横穴状になっており、地下水があり、昔から住民の生活と深く関わっていた。住民は戦時中、これらのガマを避難壕として利用した。南部一帯に特に多く、規模も大きいため、住民だけでなく軍隊まで、長くそこに隠れ潜み、生活もした。そして日本軍の司令部が南部に撤退を始め、戦線が南部に移ると、日本軍が、避難していた住民を壕から追い出したり、軍と住民が雑居していた壕では住民の食糧を軍人が奪ったり、乳幼児が泣くと、「米軍に居所を知られてしまう」と、乳幼児を抱く住民を追い出したり、幼児虐殺などの惨劇が行われた。

また、米軍は、ガマの中の日本軍に対する攻撃を強め、火炎放射器や黄燐段などをガマに投げ込み、無差別に攻撃したため、多数の住民がガマの中で死亡した。

読谷村の二つのガマのうち、一方のガマの避難民は、米軍の投降呼びかけに応じて投降し、命が助かったが、もうひとつのガマの避難民は投降を拒否し「集団死」を遂げた。「鬼畜米英」、「捕虜になるな」と教えられた戦争プロパガンダが招いた悲劇である。

明かりも、床もない自然洞窟の中の不自由な生活。外に出れば米軍の無差別攻撃、同居している日本軍も怖い。ガマの中では声を押し殺して潜む。いつ終わるのかもわからない戦争。恐怖と不安に満ちた暗いガマの中。体験学習で暗いガマの中に入った子どもたちが、ガマの外に出てきたとき、だれもが思うのが平和のありがたさであり、当時の人たちの悲惨な生活に思いを寄せる。

その他放送や演劇、音楽コンサート、フィールドワークを通じた平和教育の特別実践など多岐にわたった取り組みが展開されている。高教組の教育文化資料センター・平和教育研究委員会が発刊した「オキナワ・平和への実践」（1988年）から主なものを拾ってみると以下のとおりである。

- ① 小禄高校：放送部と演劇部が中心になって、以前に行われた戦跡めぐりのガマ体験から得たイメージを膨らませた脚本を生徒が執筆。4人の女生徒が演じた。(1986年)
- ② 本部高校：戦争資料展示・講演会・パネルディスカッション、反戦コンサートなど。(1983、1984年)
- ③ コザ高校：詩の朗読と合唱による「平和コンサート」
- ④ 美里工業高校：6・23平和語り部ロックコンサート (1987年)
- ⑤ 八重山高校：反戦ビデオ製作 (1985年)「戦後40年特集・石垣島の戦跡地めぐり」

その他、同実践集では、英語の教科で「英文証言集で沖縄を学ぶ」、物理「原子力＝核を通しての平和教育」、美術では、沖縄戦を高校生視点から捉えた反戦ポスター制作などの実践が紹介されている。

最近の状況の新聞から拾うと、2004年6月の沖縄の新聞は、学校や地域での平和集会、慰霊の日の特設授業、戦争と平和を考える催しの記事が多く紹介される。たとえば2004年6月22日の沖縄タイムスは、「演劇通し平和を考える」という見出しで、読谷高校生が村内で行った平和を考える集いについて報道している。演劇やダンス、詩の朗読などを通して、平和への思いを表現しようというのがこの試み。特に、バスケットやハンドボール部の部員40人が演じた沖縄戦をテーマにした演劇は注目を集めた。



2004年6月、読谷高校では、6・23「慰霊の日」の平和学習で、「光を放つ幾千もの平和への願い」と題して、演劇や、詩の朗読、合唱、ダンスなどをおした平和学習の成果が発表された。(写真:沖縄タイムス提供)

同じ紙面で、6月18日に那覇市内の小禄高校で行われた平和集会の様子が紹介されている。同校の図書委員や生徒会、放送部の生徒たちが制作したスライドが上演された。9・11以降の世界情勢と、戦後59年目の沖縄戦を重ね合わせ、戦争の被害者となる弱者に視点をあわせて平和への想いをつづった。

その他、21日には、本島北部の瀬底小中学校（在籍数98人）の児童・生徒らが、島の慰霊塔を清掃したことが報道された。慰霊塔は、日露戦争から沖縄戦までの瀬底出身の軍人や住民ら戦没者297柱をまつている。児童・生徒は、島の高齢者から町での戦争体験を聞き、戦争の悲惨さを学んだ後、老人会のお年寄りらと慰霊塔付近の清掃作業をした。作業後は、全員で一分間の黙とうをささげ、平和集会を行ったという。

那覇市立金城小学校では22日、慰霊の日に合わせた平和集会を開いた。全校児童や教職員のほか、初めて保護者も加わり、約1,200人が集まった。児童がイラク戦争後の子どもの現状を伝える絵本を朗読、「月桃」の合唱、親と教員の詩の朗読などもあり、参加者は平和の尊さをかみしめた。

本島北部恩名村の山田小中学校では、19日、紙芝居や絵本の読み聞かせ会を開き、児童・生徒に平和

の尊さや命の大切さを教えた。読み聞かせは、同校PTAの文化部で組織する「ルッコラの会」（吉山佳子会長）のメンバーら11人が行った。子どもたちや父母ら約70人を前に、大型の紙芝居や絵本を使い、戦争の実態や悲惨さを紹介。「戦争では、子どもや女性、お年寄りなど弱い人たちが犠牲になる」と訴え、平和の大切さを説いた。

2-2-2 「祖国復帰」と国民教育

沖縄戦とあわせ、復帰前の平和教育は主に、異民族統治から派生する問題や、それを解決する究極の目標としての「祖国復帰」をテーマにした平和教育が行われた。この項では、復帰前の教職員集団の取り組みの一つである教研集会を通して見た、平和教育の実践を見る。

学校における平和教育を担ってきたのは、教員たちである。戦後のまもなくは、日々の生活に必死で、特に学校は校舎不足、教材不足など現実的な問題に追われ、平和教育への取り組みは弱かった。しかし、米軍統治に対する反発、そして復帰への願望が強まり、教育実践でも、日本国憲法と教育基本法をどう教えるかについて教職員集団が取り組みを強化した。復帰前の平和教育は、このような事情から、沖縄戦を教材としたものよりは当時の政治や社会情勢を反映した「復帰」、「日本国民としての教育」、「米軍統治」、「基地被害」などが多かった。

1950年に発足した沖縄群島政府文教部の主催による、第3回の全島小中高校校長会が開かれ、従来の大会同様「校舎問題」、「教職員の待遇改善」等が論議されたが、その中で教育諸問題の「根本的解決には祖国復帰しかない」との復帰要求が初めて決議された。そして琉球政府発足と同日の1952年4月1日に沖縄教職員会が発足し、文教部長を勤めていた屋良朝苗⁹⁹が会長に就任した。

教職員会は1954年には教育実践の成果を持ち寄り、報告する教育研究集会（教研集会）を開催した。以後、教研集会は、通常の教科指導とあわせ、米軍統治の非合理性から派生する問題を指摘し、平和教育を研究実践する大きな役目を担った。

初期の教研集会では、教科指導が中心で、中でも正しい日本語（標準語）指導がその主な内容であった。「児童生徒の学力を高揚させるための言語指導」などをテーマにし、各地域からの研究発表が行われた。第3次教研集会の頃から、集会の活動目標として、正しい日本人としての意識を持つような子どもの育成がうたわれ、「教育基本法に示された教育目的を十分に体し、民主教育の確立に向う」との研究協議の柱が示されている¹⁰⁰。

1962年に教研集会の一分科会として、「日本国憲法や教育基本法でうたわれた、正しい日本国民の育成をめざして¹⁰¹」教育のあり方を論議する「国民教育分科会」が、設置された。同分科会は平和教育の推進などを論議する中心的な分科会となった。

初の「国民教育分科会」の討議は、①教育基本法と沖縄における教育、②米軍基地と沖縄、③学力向上と国民教育など、教科指導、米軍治世下という特殊な環境での「日本人」としての教育などが論議された。

⁹⁹ 米軍統治時代の最初の公選主席（現在の知事）で復帰後初の知事

¹⁰⁰ 沖縄教職員会編（1957）

¹⁰¹ 沖縄県教職員組合（1978） p. 3

会議では「沖縄では貧困、文化に対する劣等意識があり、常に消極的である。特殊事情下の沖縄で、日本国民としての自信を与えるのが先決であるが、どういう風にしたらよいか」の提案を受けて討議に入っている。参加者からは、「日本国民の教育を行っているわれわれに対し、米国の教育に対する介入が大きい。これを除去しないかぎり、真の国民教育は育たない。教育だけでも早急に祖国復帰すべきである」、「基地に依存している沖縄の父兄たちが、米国がいるから豊かになっている。学校の給食ミルク、学校建設など。これでは国民教育を実施してもなにもならない」などの意見が上がっている¹⁰²。

分断された「祖国＝日本」に対する憧憬が色濃く反映された分科会の内容であったことがうかがえる。教研集会の資料である「中央教研 平和教育分科会集録¹⁰³」から、国民教育・平和教育分科会の経緯を追ってみると、「学力とは何か－それに対する一提案」（第10次教研集会）、「日本国民としての意識を高めるにはどのようにしたらよいか」（第11次教研集会）、「沖縄における国民教育はいかにあるべきか」（第14次）、「沖縄における国民教育はどうあらねばならないか～四領域の中で国民教育をどのように実践すればよいか～」などが討議課題として記録されている。

良い日本人の育成—そのための正しい日本語指導、学力の向上、日本人としての児童生徒の意識の高揚などの必要性が私的にされている。そして、沖縄の特殊事情（米軍統治など）を乗り越え、教員や父母、地域が努力して、「祖国復帰」を達成することが目標、という論議の展開が、中心であった。

沖縄教職員会がまとめた「国民教育資料¹⁰⁴」から、指導案と授業実践後の子どもの感想文を以下に紹介する。復帰前、4月28日（サンフランシスコ平和条約が発効した日）は、沖縄の人々にとって日本本土との分断が決まった無念の日であった。この日が近づくと、民主団体などが沖縄の各地を回って祖国復帰を訴える、団体行進や各地で集会、学校などでも特設授業などが行われた。

下記に示したのは、1969年に本島中部のある小学校で行われた、4・28の特設授業の指導案である。祖国復帰を訴える行進団を迎えた、地域の表情、なぜ、行進が行われたのか。近隣には外国人（米国人）も多いが、沖縄の人々は日本人であること、したがって、祖国復帰が達成されなければならないことを意識づけることをねらった内容となっている。

1 学年 安ゲ田小学校

1. 題材 沖縄はどこへかえすの
2. ねらい

4・28つまり沖縄が日本から離され現在のみなし子状態におかれるようになった記念日と、民衆の大きなたたかいとしてたたかわれていることについて人々の努力を知らせる。戦争のおそろしさを知り、平和な生活が送れるような沖縄にすることを理解する。

¹⁰² 沖縄タイムス 1963年1月19日

¹⁰³ 沖縄県高等学校・障害児学校教職員組合平和教育編集委員会編（1990）

¹⁰⁴ 沖縄教職員会（1969） p. 1, p. 4

学 習 内 容	学 習 活 動	資 料	留 意 点
1. 行進団の様子について話し 合わせる 見たこと 聞いたこと	話し合いをする	沖縄をかえせ、B52 ¹⁰⁸ でていけが んばろう	
2. どんなことを考えて行進し たのだろう	4・28について話す 発表させる 日の丸の歌を歌う	日本へ早く帰りたい 戦争による沖縄の変わった生活 海上27度線で切り離されている 日本人でありながら日本人と同 じ扱いをされていない 日の丸掲揚も自由にできない	
3. どここの国の人 ¹⁰⁵		戦争によって変わった沖縄。戦 争の恐ろしさ、不安のない生活	
4. わたしたちのちかくに住ん でいる人たち ¹⁰⁶	外人が多く住んでいる		
5. どうしてそうなったか ¹⁰⁷	聞いたこと、知っていることを 言わせる		
6. 作文を読む	作文を聞く		
7. 平和な世の中 戦争のない国	自分の思ったことを話す 日の丸の歌を歌う		

塩屋小学校二年 大城ちさ子

わたくしたちはまいねん日の丸の旗をもって、平和行進団をむかえています。大川のところに並んでむかえました。お兄さんや、おじさんたちがいろんなはたを持ってわたくしたちの部落にはいつてきました。げたをはいた、町の知っているおじさん、おばさんたちも入って大きな声で歌っています。

私が一年生のとき、おきなわをどこへかえすのときいたら、お母さんが「日本へかえすのよ」といいました。わたしが、いまはどこの人なのとききました。

「日本人ですよ」でも、いまはせんそうにまけて米国人がかってにして「ひのまるのはたもきまった日にあげられるのよ。」おかあさんからいろんな話をききました。

海に線がひかれて日本のうみ、おきなわのうみとわかれているというがほんとうかな。ほんと

¹⁰⁵ 沖縄の人々がどここの国の人か、日本人であることを意識させることを意図している。

¹⁰⁶ 近くに外国人（米国人）が多いが、沖縄の人たちは日本人であることを意識させるねらい

¹⁰⁷ 沖縄戦、日本の敗戦から米軍統治にいたった経緯を紹介する

¹⁰⁸ 米軍の戦略爆撃機。

うに線がみえるかな。うみのうえであくしゅしてはやく日本にかえられるようにするそうです。しんせきのきよしおじさんはいま日本ではたらいしています。きよしおじさんは日本人になれていいなと思います。

わたしは大きくなったら日本にいつかかんごふさんになりたい。はやくみんな日本人になりたいと思います。

これらの実践や子どもの感想文からうかがえるのは、子どもたちに、「日本人」であることを強く意識させること。戦争により沖縄が日本から分断された事実、沖縄の人々が帰りたいと希望する国、日本があつて、それに向けて人々が運動を展開していることなどである。日本という国がほとんど憧憬に近い形で子どもの作文に表れているのは、「祖国復帰」が悲願と形容されていた時代を反映している。

その後「日の丸」の掲揚をめぐるのは、1980年代に教職員組合と教育行政とが、まったく逆の立場で激しく対立して以来、現在もその影を引きずっている。

2-2-3 国民教育から平和教育へ

1972年の復帰の年の国民教育分科会は、「復帰後の反戦・教育闘争をどのようにおし進めていくか」を統一テーマに設定し、同分科会が設置されてはじめて、統一テーマから「国民教育」という言葉が消えた。この前後から、「施政権返還を期して、沖縄の教育が一举に本土の反動体的体系に一本化されている。教育反動化をどうはねのけるか¹⁰⁹」など、日本政府への対抗姿勢を強く出した分科会となっている。日本への復帰はいろいろな組織を変えた。教職員会も同じである。沖縄教職員会は復帰の前年の1971年に組合組織に移行した。教員も一労働者として雇用者である琉球政府や地区教育委員会と対等に交渉するというのが組合組織移行の理由で、1974年に日教組に加盟した。

その後1978年、教研集会の「国民教育分科会」が「平和教育」分科会に名前を変えた以降の「平和教育分科会」の統一テーマは、「反戦平和のたたかいと平和教育をいかにつくりだすか」、「ナショナリズム攻撃と天皇制について」（1978、1979年）など、反自衛隊運動、有事立法反対など政治的な課題が統一テーマに多く表れるようになっていった。

2-2-4 教育行政の平和教育指導指針

(1) 「平和教育指導の手引き」

沖縄県教育委員会は1993年、「平和教育指導の手引き¹¹⁰」を発刊した。140ページから成るこの手引きでは、沖縄が古くから外国との交流を通して発展した国であったこと、しかし、悲惨な沖縄戦、異民族支配を体験するという特異な歴史を持つこと、そのために「21世紀に生きる児童生徒の国際性を培い、平和を尊ぶ心をはぐくんでいく教育が強く求められている」と、平和教育の意義を指摘している。

平和教育の基本的考え方については、以下の四項目が提示されている。

¹⁰⁹ 沖縄県高等学校・障害児学校教職員組合平和教育分科会編（1990） p. 90

¹¹⁰ 沖縄県教育委員会（1993）

- ① 平和憲法および教育基本法の精神に基づく生命の尊重と個人の尊厳を教える
- ② 国際社会の一員として国際社会に生きる態度を養い、国際社会の平和に貢献する資質を育成する
- ③ 思いやりの心を育てる
- ④ 沖縄の歴史的特性に基づき平和を尊ぶところを育てる

そしてその基本的考え方に沿って実施する平和教育を、以下のとおり規定している。

- ① 発達段階に応じて組織的、計画的に行う
- ② 学習指導要領に準拠し、教科、道徳、特別活動などの年間指導計画に位置づけて行う
- ③ 自国の文化の尊重と理解および国際協調、国際理解を促す
- ④ 福祉、環境教育の推進により平和を総合的に指導する
- ⑤ 郷土歴史を教材化して、その中で平和の尊さを教える

この指針で特に特徴的なのは各段階、各教科で、平和とは何か、平和を愛する心をどう教えるのかなどを小中高校のレベルごとに一覧表にまとめた「平和教育のマトリックス」である。図2-1に紹介する。

指導計画に基づき、各教科での指導案例が示されている指導案の中で、小学校低学年の事例を見てみる。国語教科では、いわゆる戦争文学といわれる教材を使つての指導案が紹介されている。

=教材= (第三学年)

ちいちゃんのかげおくり¹¹¹

目標：場面の移り変わりをおさえながら、会話文に気をつけて読み、情景や人物の気持ちを創造することができる。人物の言動についてかんがえさせられたところなどを視写して、思ったことを話し合うことができる。

指導上の視点：戦争の悲惨さを直接訴えた作品ではない。影送りにちいちゃんの思いを象徴し、間接的に戦争というものの悲惨さを表している。「みんなで影送り」から「ちいちゃん影送り」になってしまう事実の意味をじっくり考えさせる¹¹²。

その他、国語の教材として取り上げられているのは、戦争という過酷な状況で生きなければならなかった人たちの悲しみと、人間の愛情や強さを描いた「一つの花¹¹³」など、戦争を扱っているが、戦争がもたらす悲しみと愛情を扱った美しい物語が教材として提案されている。

¹¹¹ 作：あまきみこ、絵：上野紀子（1982）。戦争によって命を奪われながらも、なお家族を慕うちいちゃんの姿を通して、戦争の悲惨さと家族愛を描く作品。

¹¹² 同上 p. 31

¹¹³ 今西祐行著。戦争と家族愛を描いた作品。

図2-1 平和教育のマトリックス

各教科・道徳・特別活動 目標・内容等	国語		社会		理科		生活	音楽	図工	家庭	体育	道徳	特活
	学低・年中	高学年	中学年	高学年	中学年	高学年							
(1) 生命の尊さを教える ①自他の生命尊重 ②動植物の愛護	①	①	①	①②	①②	①②	①②				①	①②	①②
(2) 平和の尊さを教える ①個人の幸福 ②安らぎのある社会環境 ③美しい自然環境	①③	①③	②③	②③	③	③	③	③		②		①③	①②③
(3) 戦争の恐ろしさを教える ①第一次世界大戦 ②第二次世界大戦と原爆投下 ③慰霊の日(沖縄戦と資料館)	②	②	③	①②③									③
(4) 戦争の原因について考えさせる ①日清・日露戦争とその背景 ②15年戦争とその背景 ③軍事基地			③	①②③									
(5) 国際平和に関する活動等の意義について考えさせる ①国際連盟・国際連合 ②軍縮会議・条約等 ③オリンピックの開催				①②③							③		
(6) 自他を理解し合う心を育てる ①信頼・友情 ②寛容 ③異文化理解と尊重 ④ユネスコ憲章等の理解	①	①③	③	③④			①	③	③	①②	①②③	①②③	①②③
(7) ルールを守る心を育てる ①公德心と規則の尊重 ②礼儀 ③正直・真実・明朗 ④法と正義	①②	①②	①	①④	①	①	①②③	③	①	①②	①②③	①②③	①②
(8) 助け合う心・思いやりの心を育てる ①親切 ②勤労 ③勇気 ④ボランティア・福祉活動			④	④			①②			①②④	①③	①②③ ④	①②④
(9) 感謝の心を育てる ①家庭愛 ②愛校心 ③郷土愛 ④愛国心 ⑤人類愛		①⑤	③	⑤			①②④	②③④		①		①②③ ④⑤	①②③ ④⑤
(10) 美しい心を育てる ①感動する心 ②畏敬の念 ③人間愛 ④芸術愛 ⑤自然愛	①⑤	①③	⑤	⑤	⑤	⑤	②③⑤	①④⑤	①④	①③	①④	①②③ ⑤	①②③
(11) 本県の歴史性、地域性を通して国際性を養う ①琉球王国期の大交易時代と平和外交 ②南の玄関口としての沖縄 ③復元された首里城			①②	①②③									

出所：沖縄県教育委員会編（1984）

音楽科の平和教育指導案¹¹⁴

目標：表現および鑑賞の活動を通して音楽性の基礎を培うとともに、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育て、豊かな情操を養う。「国歌」君が代は、各学年を通じ、児童の発達段階に即して指導すること。

指導上の視点：国歌については「指導計画の作成」の方に位置づけられている。入学式、卒業式のときなどに正しく唄う事ができるようにする。

同指針の中で「慰霊の日」が取り上げられているのは6学年の社会科の授業指導案である。¹¹⁵

目標：沖縄戦の様子や資料聞き取り調査等によって調べ、沖縄戦の具体的な事実を発見し戦争の悲惨さを実感し、平和を求める心情を育てる。

過程	学 習 活 動	指導上の留意点
つかむ	<p>① 沖縄戦のようすについて調べたことを発表する。日本の中で唯一の地上戦がおこなわれた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ☆ 犠牲者20万人（県民12万人） ☆ ひめゆり部隊 ☆ 鉄血勤皇隊の悲劇 ☆ 対馬丸沈没 ☆ 集団自決・・・など 	<p>☆体験者からの聞き取り、資料調べなどをさせておく</p> <p>☆できれば体験者に教室で話してもらう</p>
追求する	<p>② どうして沖縄で地上戦がおこなわれなければならなかったのだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ☆ 本土防衛の「捨石」 <p>③ どうして一般住民までもが犠牲になったのだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ☆ 地上戦の激しさ“つかまるより死を”の教え ☆ 住民をまもるのではなく、米軍と戦う、自分自身を守る日本兵 ☆ 戦争の狂気 <p>④ 犠牲になった人たちはどのような思いでなくなっていたのだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ☆ 対馬丸の学童 ☆ ひめゆり部隊や鉄血勤皇隊 ☆ 集団自決の家族 	<p>☆日米戦略の犠牲となった沖縄を地理的、歴史的な面からその宿命を見つめさせたい</p> <p>☆沖縄戦の悲劇を具体的な事実として、ありのままに児童に捉えさせなければならない</p> <p>☆学童・生徒までが戦闘に参加させられ、尊い命を失っていったことに思いを馳せ、恐ろしさを実践させたい。</p>

¹¹⁴ 同上 p. 44

¹¹⁵ 同上 p. 46

まとめ	⑤ 沖縄戦の様子を調べて、心に残ったことを発表する。 ☆ 戦争の悲惨さ、残酷さ	☆かつてこれほどの悲惨な戦争が歴史の事実として厳然とあったことを確認する。
	⑥ 私たちにこれからできることはどんなことだろう。「戦争と平和」についての考え方を書いてみよう。 ☆平和に向けての実践	☆児童の日常生活と関連させて、戦争と平和を考えさせる。 ☆生命の尊厳のために尽くすことが平和につながるということを体得させたい

以上、「手引き」から県教育委員会が「平和教育」で何をどう教えるかの事例をいくつか紹介した。同手引きの特徴は、マトリックスで明らかなように、各教科の中で広義の平和を教え、それが相互に関連しており、発達段階における目標が具体的に示されている点である。もう一つは憲法、教育基本法の理念、学習指導要領に沿いながら、国際連合、国際協調に発展させていくものと捉えている点が上げられる。

沖縄戦「慰霊の日」の指導案は、これまで見た教職員組合の復帰後の取り組みと大きな差はないが、教職員組合が特設授業を中心とした平和教育を強調している点と、「有事法制」「PKO法案」など常に時代時代の政治的状况に関連付けて運動の指針を示したことに比較すると、その立場の違いは明確である。

年間を通じて、各教科の計画の中に「平和教育」を位置づけるというやり方は、従来沖縄ではあまりなかったものである。この時期、教職員組合と行政の間には種々の問題をめぐって確執が続いていたこともあり、「常にわれわれの平和教育を弾圧してきた県教育庁が出した手引きであり、しっかりと分析し、批判しなければならない¹¹⁶⁾」と、沖教組は反発した。

ただ、沖縄からの平和発信を考える際に、沖縄の特徴をどれだけ織り込むか、全体ボリュームの中で「沖縄戦」が少ないとの意見や、基地問題についての指導案の少なさなども、問題として挙げられた¹¹⁷⁾。

(2) 県平和祈念資料館による「児童・生徒平和メッセージ展」

住民が体験した沖縄戦を後世に正しく継承していくことを大きな目的とする平和祈念資料館が毎年開催しているのが、「児童・生徒の平和メッセージ展」である。児童生徒の平和に関する絵画、作文、詩などの創作活動を通して児童・生徒が戦争と平和について考え、平和を学ぶ機会をつくり育てることをねらいとしている。応募作品から優秀な作品を選定し、展示広報する。1992年から開始された事業で、応募者数は年々増加し、1500点近い応募がある。

肉親から伝え聞いた戦争の悲惨さ、家族を失った悲しみ、平和の喜び、平和を祈る気持ち、命の誕生の厳粛さや命の尊さなど、子どもらしい豊かな感性と、素直な色彩や文章で表現されている作品が数多く寄せられている。

¹¹⁶⁾ 沖縄県教職員組合編（1993） p. 78

¹¹⁷⁾ 同上 p. 78